

空

平成22年10月20日発行

第8巻第5号

通巻第33号



2010・10

SORA 33号

秋風

柴田 佐知子

熟れ柿のあやふき皮となりにけり

秋風や釘抜けし穴やや縮み

猪の短き脚の縛らるる

桃すするどこか小暗き思ひかな

名将の貌して反れるいぼむしり

―「俳句研究」秋号より―

祝杯を顔の高さに夏館

叱られし子がもの言はぬ油照り

蛞蝓になる蛞蝓に触れし手が

信号に待たされてゐる祭馬

噴煙を叩きて阿蘇の大夕立

蜻蛉の頭くるりと晴れ渡る

噴煙を加へて阿蘇の鰯雲

草原は見事に暮れてきりぎりす

安心の顔に老いたりセルの父

縁側に出て伸ばしたる盆提灯

いづれ皆去るこの世なり踊りけり

八朔や母の起居は水のごと

芋虫のちよつと進んで世に遠し

札所ごと山は暮れたり衣被

老人となりし父はは雁わたる

掛け軸を鯉の上れる月の夜

机

高倉和子

机より始まる世界秋の夜
老人の増ゆる日本やきりぎりす
逃げる子の笑ひ通しや秋祭
山なみのふいに途切れて昼の虫
参道の砂利の痛さも秋暑し
覗くにはほどよき穴のありて秋
ふるさとの川は細りて碇星
連山の少しずれたる稲光り
一枚の波のぬめりや月の夜
耳聴くなりて一人の夜長かな



血止草

中田みなみ

芋殻焚くうしろ静かに通りけり
枝豆のみどり沁々法事了ゆ
諭されし寂聴さまや血止草
蓮の葉の露を廻してあそびけり
稲妻や折りしも形見分けてをり
魔の淵にとどめさしたる稲光り
オートバイ遂に稲妻振り切りし
夕月や線路づたひに保安帽
星とべり甲斐に藤城影絵館
峠路を越ゆるバイクの灯も秋に



祈りては

滝壺へかづらを掴みつかみつつ
引き返す吊り橋合歡の閉ぢたれば
殉教の灘を足下にラムネ飲む
ごつごつの主婦の手なりぬ水羊羹
夏痩せず許したまへと祈りては
出棺の曲弾き了へて炎天へ
茄子咲きて常にをとこの三步あと
渡船にて残りし虫を売り了へる
氷菓舐めをり骨盤で嬰を支へ
凌霄花をとこ一人を持て余す

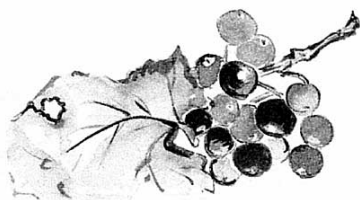
荒井千佐代



秋蛩

服部 早苗

マロニエの花雨が来て雨止んで
墓鳴くやこの世と違ふ夜の淵に
今年竹粉を吹く指のあとのつく
虫干や蝶の展翅の一箱も
旅の本目隠しにしてハンモック
疎水までバス乗り継いで蛩狩
揚花火闇に走り火またひらく
鬼灯の罅ばりとむく乾く音
病みてのち見えなくなりし秋蛩
焦げ目などつけゐて秋の団扇かな



黒揚羽

中条 さゆり

どんぐり

柴田 志津子

大粒の夕立磧湯叩きけり

黒揚羽むかし牛馬の水飲み場

滝裏にのぞくこの世の面白き

夏負けて内の阿修羅も細りけり

眠られぬ夜の水中花うとましき

降り出してすぐに崩るる踊の輪

くるぶしに投網からまる揚花火

名水に丸太一本初紅葉

峰雲の鬼相となりてなほ太る

海鳴りか地鳴りか山笠^{やま}の潮井とり

三伏や己はげます厨事

地にくねる蚯蚓を鶏の奪ひあふ

金魚飼ひ客足遠き履物屋

親指を吸ふみどりごや稲の花

どんぐりを並べて守衛室は留守

領布振ればわれも佐用姫秋の雲

山笠

矢野百合子

勢ひ水

大地真理

山笠男^{やま}かけ来る腕とてば下げて

長老の叱責受くる子供山笠

太き腕泣く子を山笠に押し上ぐる

早暁に浮き出す山笠の水法被

追山笠や背中がはじく勢ひ水

追山笠や法被の背文字流れ出す

蟬果つるしかと手足を抱きしめて

手水舎に真紅の手拭敗戦日

追ひ山の清道に息渦を巻く

追ひ山や大雨に混じる勢ひ水

山笠果^{やま}てて骨組はやも現るる

滝壺の激しくしぶく飾り山

生れたての入道雲の白さかな

裏返る蓮の葉白し花はなほ

噴水の己れの高さ知らざりし

炎熱やにらみの効かぬ鬼瓦

空高し

高倉恵美子

絶壁

松田明子

ふるさとの川に始まる涼しさよ

夏空を押し広げたる楠大樹

老人に飽きし一日百日紅

サングラス声かけられてとまどひぬ

征きし友還りし友や終戦日

豆腐屋の笛待ちし日も今朝の秋

羽白く開きて生るる秋の蝉

村中の電線消えて空高し

藺の花の咲いて沖へと干拓地

空滝とは絶壁のこと雲の峰

殿を揺らす吊り橋蝉しぐれ

ふるさとを遠く離れて草を引く

母逝きし日の静かなる遠花火

裏方の小屋の奈落に三尺寝

秋水に日の斑のあそぶ真昼かな

秋暑し一気のにのぼる馬柵の道

噴水

鳳 蚕 華

陽明門

樋口みのぶ

長咲きの紅を失ひ合歡の花

小気味好し蠅虎の身構へは

埋め立ての渚遠くに浜万年青

空蟬の目玉清らに透き通る

噴水のしぶきに縦の縞模様

生姜の欠けら縮み行く大暑かな

臨終に音ひとつ無し遠花火

そよ風の続べてゐるなり芋の露

床の間に飾りたるごと子猫かな

目が合へば笑つてしまふ酷暑かな

湧水の脇に盛塩茄子洗ふ

ラムネ抜く陽明門の彩に酔ひ

掌にのれば仏頂面の青蛙

夕萱や木の名下げある遊歩道

一輛に乗客ひとり夏の果

ぎこちなく赤子抱きゐる帰省の子